令和５年度 外国語教育

The English Edu. Newsletter vol.5

第3回英語発信力育成事業
第4回英語発信力育成事業

滋賀県教育委員会事務局高校教育課・幼小中教育課　令和６年１月

今回は、英語発信力育成事業の第3回（10月2日実施）、第4回（11月6日実施）についてお伝えします。
今年度の本事業では、長浜市立西中学校区における小中連携を通して、児童生徒の英語による発信力向上に向けた授業改善と教員の指導力向上に係る研究を進めてきました。講師として、岐阜大学教育学部　巽　徹教授をお招きし、4回にわたって指導・助言をいただきました。

～研究テーマ～
音声と文字を効果的に指導する学びの接続
～自らの言葉で豊かに発信する力の育成をめざして～
～西中学校区の共通実践～
〇Small Talkを軸にした系統的な指導
〇「読む」「書く」を意識した丁寧な接続

第3回「英語発信力育成事業」

長浜市立長浜小学校
〇〇　〇〇　教諭

長浜市立長浜小学校で行われた公開授業と研究推進委員会の様子を紹介します。

＜研究授業＞

単 元 名：Unit4　Summer Vacations in the World
（NEW HORIZON Elementary English Course 6）
単元目標：お互いのことをよく知るために、夏休みの過ごし方や思い出を紹介し合う活動により、短い話を聞いてその概要をつかんだり、自分の思い出を伝え合ったりすることができる。また、ALTからの手紙を参考にして返事を書くことができる。
本時目標：ALTに夏休みの思い出を伝える手紙を書くことができる。（6／7時間）

本時は、夏休みの思い出をクラスメイトに伝えるやり取りをしたり、ALTが夏休みの思い出について話すビデオレターを視聴したりし、これまでに音声で慣れ親しんだ表現を生かして、返事を書くという授業でした。「自分のことをもっと知ってもらうために、ALTに夏休みの思い出を書いて伝える」という目的や場面、状況等を設定することで、児童は主体的にペアでのやり取りを行ったり、ALTからの手紙を読んだりして、返事を書く活動につなげることができました。

【音声で慣れ親しんだ語句や表現を「書くこと」につなげるために意識されていたこと】

① 指導者同士、指導者と児童とのやり取りを何度も聞いて、音声に慣れ親しむ活動を行う。
② すでに聞き慣れた表現を用いることができるトピックでやり取りを行う。
③ 十分に音声で慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を読んだり、書き写したりする活動を行う。
④ 「音声と文字」を一致させながら、例文を参考に基本的な表現を用いて、書く活動を行う。

＜研究推進委員会＞

〇〇教諭の授業を基に、中学校ではどのような単元計画や活動が考えられるかという視点で、小中の接続について熱心に協議されました。

＜指導助言＞ 岐阜大学　教育学部　巽　徹　教授

本時の授業で見られた児童の姿を踏まえながら、「音声と意味」「音声と文字」「文字と意味」をどのようにつなぐとよいか、言語活動を充実させるにはどうすればよいか、という視点で指導助言をいただきました。

岐阜大学教育学部
巽　徹　教授

〇何度も同じ表現を聞くことで、児童は徐々に意味が分かってくるようになる。児童が言語材料に繰り返しふれられるような活動を多く取り入れてほしい。
〇本授業において、「書くこと」の前に、音声での丁寧なインプットがあったからこそ、児童はスムーズに書くことに移行できた。
〇Small Talkを継続的に行うと、児童の発話量が増えていくので、繰り返し実施するのは重要なことであり、充実した言語活動につながる。

第4回「英語発信力育成事業」

長浜市立西中学校で行われた授業研究会の様子を紹介します。

＜研究授業＞

単 元 名： Unit7 Foreign Artists in Japan
（New Horizon English Course 1 東京書籍）
単元目標： ALTに日本の文化について伝えるために、日本の伝統芸能や伝統工芸に関する文章を読んで理解し、「私の一押しの人」について、つながりのある文で話すことができる。また、その内容を書き、ポスターとしてまとめることができる。
本時目標：ダイアン吉日さんがどのように落語を行っているかについて、英語で話して説明したことを、書いてまとめることができる。（6／11時間）

長浜市立西中学校
〇〇　〇〇　教諭

今回の研究授業において、Small Talkで、新出文法(Which do you like, A or B?)の定着を図ることから授業が始まりました。その後、教科書本文の音声を聞いて、聞こえてきた単語やフレーズを基に本文の内容を理解し、指導者と生徒とのOral Interactionを通して内容を整理していきました。〇〇教諭が意識されていたのが、本事業の研究テーマでもある「音声と文字をどのように一致させるか」という点です。また、 本事業の研究を進めるにあたり、どの活動が「音声と意味」「音声と文字」「文字と意味」を一致させているのかを意識して、単元計画を立ててこられました。

【音声と意味、音声と文字を一致させるために意識されていたこと】

〇教科書本文の音声を繰り返し聞く活動を行う。
〇内容の理解が深まるよう、指導者と生徒とのOral Interactionを繰り返し行う。

【文字と意味を一致させるために意識されていたこと】

〇音声と意味、音声と文字の理解が深まってから音読活動を行う。
〇音声で十分に慣れ親しみ、読んで意味が理解できるようになってから、書く活動を行う。

＜授業研究会＞

研究推進委員から、長浜小学校および西中学校での取組や研究成果を御紹介いただきました。

・小学校では「英語で反応すること」、中学校では「英語で質問すること」を意識して、Small Talkを実践してきた。児童生徒は「なぜ、その英語を使うのか」を考えるようになり、目的意識もって、言語活動に取り組んだ。(小・中)
・聞く活動で豊富なインプットを行ったので、教科書の本文を初めて見ても、スムーズに読めるようになっていた。(中)
・本文を読めるようになったことで「音声と文字」「文字と意味」がつながり、書く活動も充実した。(中)
・小学校、中学校が別々に指導するのではなく、小中連携を密に行い、系統的に指導することが重要である。その系統性を整理、視覚化するために、特に、小6と中1について、学期ごとの指標を整理した「長浜市版CAN-DOリスト」を作成し、指導に生かした。(小・中)

【本研究の成果】

- 小中学校間におけるSmall Talkの系統的な指導
- 音声、文字、意味のつながりを意識した小中の滑らかな読み指導
- 「読むこと」から「発信する力」の育成
- 長浜市版Can-Doリストの作成

【今後の展望】

- 長浜市版Can-Doリストを生かした４技能５領域のスムーズな小中連携
- 現小学６年生が中学校に入学後、どのように英語学習状況が変容したかを知るための授業参観等の実施

（授業研究会研究推進委員の発表スライドより）

＜指導助言＞ 岐阜大学 教育学部 巽 徹 教授

長浜小学校と西中学校の授業の様子を基に、円滑な小中接続の方法等について、指導・助言をいただきました。

〇音声を聞きながら、英文を目で追い、まとまりごとにスラッシュを引く活動は、「音声と文字」が一致できているかを認識するために有効である。
〇Small Talkはマンネリ化してしまうことがある。それを避けるために、いつ頃にどのようなことがSmall Talkでできるようになっていればよいかを設定することは重要である。児童生徒と目標を共有するために、スモールトーク版の「CAN-DOリスト」を作成するのもよい方法である。